

自分なりの美意識を育む図画工作科指導法の在り方

— ポートフォリオ評価法を活用した実践研究を通して —

中島 敦夫 岡 芳香 内田 雅三 中村 和世

1. はじめに

図工・美術科では、昨年度まで「ユニバーサルシティーズンシップ育成と関連した美術教育の在り方を探って」と題し、附属三原学園の研究テーマに連動して、ユニバーサルシティーズンシップを有するために欠かせない「協同的創造力」を育む題材及び授業の実践研究を行ってきた。成果として、お互いの関わり合いを生むことを仕組んだ題材を通して、子ども達の創造力、人間関係力が増進されることが示された。しかし、コミュニケーションの過程で子ども達が、どのように感性を働かせながら学び合いを深めているのか見取るのが難しいことが課題として残った。また、集団でのイメージの練り上げが不足し、作品作りにあたって、役割分担にのみ作業が終止するグループが見られ、作品作りのイメージや見通しが持てない子どもがいることが分かった。課題の提示や話し合いの過程において、集団の中で自分なりの感性を働かせられるような指導の工夫の必要性を感じた。

平成23年度から実施される学習指導要領の図画工作科の目標に「感性を働かせながら」という文言が加えられた。これは、子どもの感じ方や思いを一層重視するためである。本研究を通して、子どもが「感性」を働かせて、自分なりの表し方やみ方を形成していくためにはどのような指導方法や手立てが有効なのか探っていく。昨年度まで行ってきた協同的創造力を育む活動を発展させていくことで、表現と鑑賞の活動において自分なりのイメージや見通しを持ち、主体的に取り組む子どもを育てることができると考える。これは、生活や社会の中で生きる力を育むという生涯学習の観点でも有効である。

2. 研究の目的

表現や鑑賞の活動を通して、他者とかかわり合いながら、新しい文化を形成するために必要である自分な

りの美意識を創り出していく力を育むためにポートフォリオ評価法を活用した実践研究を行なって検証をする。

3. 研究の方法

(1) 自分なりの美意識を育む授業づくりの視点

平成20年8月発行の『小学校学習指導要領解説図画工作編』では、「感性」について「感性は、様々な対象や事象を心に感じ取る働きであるとともに、知性と一体化して創造性をはぐくむ重要なものである。」¹⁾と示されている。また、中央教育審議会答申には、「言語は、知的活動（論理や思考）やコミュニケーションや感性・情緒の基盤でもある。」²⁾と記されており、言語活動の充実を図ることが感性を豊かに働かせていくにあたって有効であることが明記されている。これらを踏まえ、本校の図工・美術科では、図1に示されるような知性と感性の相関的な関わり合いや言語活動を取り入れた学習プロセスを通して、子ども自身の美意識を育てることを目指している。

本年度は、学習による成長を子ども自身が認識することで学習効果を高めることや、学習の過程で生じた学びを評価することに有効なポートフォリオ評価法を活用した実践研究を行う。

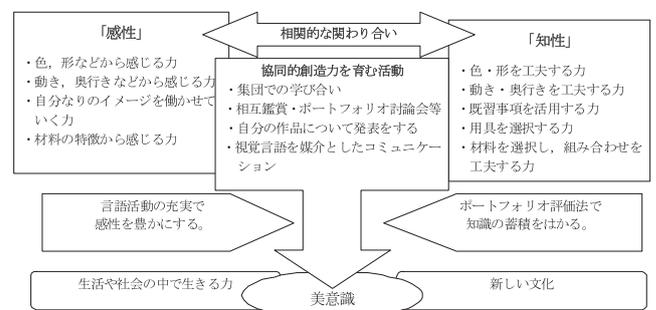


図1 自分なりの美意識を育む授業づくりの視点

Atsuo Nakashima, Yoshika Oka, Masazou Uchida, Kazuyo Nakamura: Art Education Instructional Strategy for Developing the Child's Personal Aesthetic Feeling—Practical Study through the Application of Portfolio Assessment—

(2) 検証にあたって

①題材開発

知性と感性との相関的な関わり合いをベースにしなが、言語活動を積極的に取り入れた協同的な学びの過程を通して、子どもの自分なりの美意識を育むことを目指した伝統文化に関する題材開発を行う。

○活動の例

- ・コメントが書かれた付箋を使った相互鑑賞
- ・ポートフォリオを用いた批評・鑑賞会
- ・自分の作品の説明を書いてまとめる活動
- ・色・形・イメージを大切に教材作り
- ・視覚言語を生かした活動（体験から感じ取ったことを絵や作品に表現して伝える。）

②ポートフォリオ評価法の開発・実施

- ・自己の振り返り

題材ごとの記録や振り返りを綴ることで自己の造形活動と向かい合えるようにする。

- ・コミュニケーションの手段

鑑賞による交流を残したり、討論会を開いたりすることによって自己の活動を再認識し、多様なみ方を育て、造形活動に生かせるようにする。また、定期的に家庭に持ち帰らせて、言葉掛けをしてもらうことで子ども達の励みになるようにする。

- ・評価

学習時や単元終了時、学期末に子どもの学習成果や学習過程を評価する際に活用していく。

授業終了後に見ることで、学習時には評価できなかった子どもの発見や発想の広がりを見つけことができ、学習にフィードバックして授業の質を高めていくのに有効な手段になる。

また、学期末の評価の資料の一つとして用いることで個人の作品の質的な高まりや傾向などをとらえることができる。

③アンケート

5月と12月にアンケートを行い、事前と事後での変容を分析し、研究の成果と課題について考察を行う。項目は、主に自己の造形活動に関するもの（自分なりの美意識）、他者との関わり合いに関するもの（協同性）、子ども達の創造性に関するものである。

4. 実践事例1

(1) 題材について

○題材名「まごころかんじて」

○学年 小学校2年生 80名

○実施時期 平成21年11月～12月

○題材の概要

紙粘土でオリジナル和菓子を作り、お互いの作品を

鑑賞する活動を行う。「季節」と「おいしさ」をテーマにイメージさせることで、色の組み合わせを考え、形を工夫して造形活動を行うことができる。お店屋さんごっこでの相互鑑賞では、自分や友だちの和菓子のよさを意識しながら買い物することで自分なりの美意識を育てていくことができるようにする。学習を通して、和菓子にこめられた意味や思いについて知り、我が国の伝統文化について学ぶことができる題材である。

○題材の目標

- ・自分の作りたい和菓子を思いつき、お茶会を開くことに興味を持つことができる。
- ・季節のイメージから自分の表したい色や形を思い出すことができる。
- ・色の組み合わせや形を工夫しながら、「おいしそう」に見える和菓子を作ることができる。
- ・友だちの作品を鑑賞して表し方のよさに気づき、自分の作品に生かすことができる。
- ・集団での鑑賞活動を通して、新しい表し方に気づくことができる。

○学習計画（全7時間）

第1次 わがしってなーに？ (1時間)

第2次 わがししょくにんにチャレンジ (4時間)

第3次 お店屋さんごっこを開こう (2時間)

(2) 学習の実際

和菓子の鑑賞

和菓子は、秋に関連した4種類（紅葉、柿、菊、イチョウ）の実物を用意した。子ども達は、色や形などに着目して、比べながら見ることで季節などの特徴をとらえて交流することができた。最後に和菓子を食べた。初めて和菓子を食べた子どもは、全体の6割ほどであり、印象深い出会いになった。



図2 和菓子との出会い

オリジナル和菓子作り

伝統文化を体感するために着色や模様付けは和菓子職人と同じ作り方で行なった。自分で好きな季節を選び、季節のイメージに合うように色とモチーフを考え

ながら和菓子を作った。さくらやクリスマスを意識したものなど既成の概念にとらわれずにバラエティ豊かな作品が仕上がった。また、和菓子に自分の工夫した点などを書いたおすすめポイントを添えて、廊下に展示し子ども達の相互鑑賞を促した。おすすめポイントには、和菓子作りにおける自分なりの形や色に対するこだわり、思いが込められていた。(以下に、一部抜粋。)

- ・わざと色をうすめたらいいよ。
- ・まっかなりんごにするのはむずかしかった。
- ・さんごしょうを思いうかべながら作りました。
- ・本物みたいがんばりました。自分なりの形です。



図3 オリジナル和菓子

お店屋さんごっこでの相互鑑賞

作った和菓子を使って、お店屋さんごっこを行なった。買い物の手順としては、①自分の気に入った商品を選ぶ、②鑑賞の言葉を書いた「まごころカード」をお金の代わりに渡す、③商品として和菓子の写真を受け取るというものである。お店の運営は班で行い、自分の作品だけでなく、友だちの作品のいいところもお客さんに紹介する活動を行った。



図4 お店屋さんごっこの様子

子ども達は、並べられた商品の中からどれにしようか、わくわくしながら自分のお気に入りの和菓子を探した。そして、買いたいお店のところに行って、おすすめポイントを聞いた。このときにお客とお店の人の間にやりとりが生まれ、やりとりを通して活発な相互鑑賞がなされた。

(3) 成果と課題

○伝統・文化との関連

実施前アンケートでは、和菓子について知っている子どもは、12.5%しかいなかったが、題材終了後に和菓子について興味を持つようになった子どもは、97.5%に増えた。導入の段階で本物に触れたこと、学習を通して和菓子に込められた意味や職人さんの願いを知ることで、一層関心を深めたことが要因になっている。数人の子供から、実際に和菓子屋さん自ら足を運び、和菓子を買って食べたという報告もあった。

○表現力

「目で味わうこと」をテーマに季節感などを考えながら色や形に気をつけて表現をしていた。色を変えるときには手をきれいに洗って色が混ざらないようにする等、子ども自らが気をつけて活動する姿が見られた。

○鑑賞の力

お店屋さんごっこでの鑑賞カードには、普段の相互鑑賞の時よりも詳しい内容が書かれていた。「どんぐりの先がとんがっていいと思いました。」「はっぱのくきからのくぼみがいいです。」「オレンジ色がうすくてきれい。」等、生き生きとした記述がなされていた。

また、子ども達は、お店屋さんごっこでのやりとりを通して、相互鑑賞を深めていた。鑑賞の活動を促したものは、作り手として友だちにみてほしいという子ども自身の動機であり、お互いに見合うことがより大きな満足感を生み出すことにつながった。

●子ども達の満足度

活動後のアンケートでは、鑑賞活動としてのお店屋さんごっこの満足度は、93.5%であった。満足できなかった理由には、「お店屋さんで商品があまり売れなかった。」というものがあつた。作品が、人に選ばれないということが意欲や自信の低下につながることを考えられる。また、2年生の子ども達は、鑑賞カードに書かれている評価の内容よりも、どれだけ多くの友達からカードをもらったかに価値を見出してしまいがちであった。この課題を克服するような活動形態や働きかけの更なる工夫をしていくことが今後の課題である。

5. 実践事例2

(1) 題材について

○題材名「感じて広げて～ピンチアート～」

○学年 小学校6年生 77名

○実施時期 平成21年11月～12月

○題材の概要

身近な洗濯ばさみを素材として、それをはさんでつなげたり組み合わせたりしながら、色や形などの美し

さについて自分なりの表し方やみ方を広げてしていくことをねらいとしている。洗濯ばさみは、挟む角度が比較的自由であり、挟む場所もたくさんある。また、作り直すことが容易にできることから試行錯誤を繰り返しながら、子ども達が自分なりの造形感覚を働かせることができる素材である。

○題材の目標

- ・洗濯ばさみをつなげたり組み合わせたりして表現することに興味や関心をもつことができる。
- ・つなげたり組み合わせたりした形から自分なりの表したいもののイメージを広げる。
- ・色や形の美しさを考えながら、自分の表現を工夫し追求する。
- ・お互いの表し方のよさや美しさをみつける。
- ・仲間と協力してアイデアを出しながら制作する。

○学習計画（全6時間）

第1次 ピンチアート

第2次 みんなでピンチアート

第3次 鑑賞会準備

課外 ピンチアート展へようこそ

(2) 学習の実際

個人によるピンチアート制作

ピンチは蛍光色の桃・青・黄・緑の4色を準備した。個人制作時には一人30個を与えて自由に制作させた。また、制作した作品はデジタルカメラで撮影して残し、さらに次の作品を制作し直すことにすることで、造形活動の多様性を試すことができるようにした。子どもたちは、思い思いのはさみ方で立体物を制作したり平面的な模様を制作したりした。

時間の経過と共に色の組み合わせをパターン化して美しさを表わしたり、友達の挟み方を参考にして立体的にしていったりするようになった。最後には出来上がった作品をスクリーンに映し相互鑑賞をした。さらに、自分の撮影した作品は印刷して図工ポートフォリオに挟むことにより、作品について振り返ることができるようにした。



図5 作品名「恐竜」

友達とのピンチアート共同制作

お互いの発想を出し合う中で、他者と交流し合うなかで広がる美意識を育むために小グループでの共同制作を行った。4色をとりまぜ約1200個のピンチを各グループに素材として与えた。1グループは7名～8名とした。テーマは6年生という立場から他学年に向けて「伝えたい大切にしてほしいこと」とした。制作後はピンチアート展を開き、他の学年の子ども達に発表することを伝え一層の意欲の喚起を図った。子ども達は、「友情」「平和」「学校」「仲間」など学校生活や他教科で学んだことを生かしたものを設定した。さらに、制作前にアイデアの相互交流や見通しを持つことをねらいとして、簡単なアイデアスケッチをさせた。

共同制作時には、アイデアスケッチをもとに協力して制作できた。また、制作過程において、新たにアイデアを出し合い、それらを付け加えながら個人制作では難しい大掛かりな作品を作り上げていった。



図6 共同制作の様子

ピンチアート展を開く

昼休憩時にピンチアート展を開催した。作品の側には、表わした事柄を書いたボードを添えた。訪れた子ども達には、一言コメントカードを渡し鑑賞した感想を書いてもらうようにした。

6年生の子ども達は、他学年が大量のピンチを使ったカラフルな作品に歓声を上げながら鑑賞する様子に、喜ばしい表情を浮かべ、もらったコメントカードを熱心に読んでいた。また、展覧会に来た子どもが自由に作れるためのピンチを準備したコーナーでは、6年生が一緒になって作る姿も見られた。

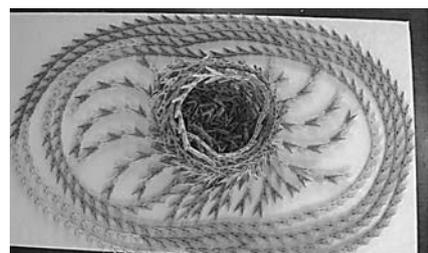


図7 作品名「友情の和」

(3) 成果と課題

○表現力

素材としたピンチは、子ども達にとって洗濯物を挟むものという日常生活の道具の一つとしてとらえられているものであった。それらを造形活動の素材として表現させる本題材は、子ども達に新しい造形活動の視点を与えるものであったと考える。たとえ過去に日常生活の遊びの中で経験したことがあったにせよ、小集団で大量のピンチを使うことはなかったであろう。

意外で簡単に作り直しが可能なピンチを素材としたことは、自己表現の新たな広がりの一つとなったと考える。また、ピンチは平面的にも立体的にも表わすことができる素材であることから、個々の多様な発想に対応しうる素材であった。さらに、4色という色の幅を持たせたことにより、色合いの美しさを追求することも可能であった。

同じ素材による個人制作と共同制作を段階的に取り入れたことにより、自分なりの美しさを追求できる場面と他者の美意識に触れたり取り入れたりする活動場面が設定でき、お互いのみ方や表わし方を多面的に交流することにつながった。

本題材において、自分なりの表わし方やみ方の広がりをもとに点を検証する活動として、共同制作をした後、再度個人制作を試みる事が可能な学習の流れを仕組むことが今後の課題として残された。

○鑑賞の力

制作した作品をデジタルカメラに撮影して残す活動を仕組んだことにより、子ども達は、自分の作品をどの角度から撮影すればよいかを吟味していた。自分が表わしたものを、再び「よくみる」ことにつながっていった。

友達の作品をみる場合は、リアル性、色の組み合わせを視点としてその表現内容に対して感想を述べるが多かった。さらには、挟み方や挟む場所の工夫にも言及する場面がみられた。このことから、ピンチという素材の特性にもよるであろうが、「どうやって作っているのだろう」という「問いを持ってみる」ことも鑑賞の視点の一つとなることが分かった。

さらに、共同制作作品の展示会で、他学年の子ども達から感想をもらったことにより、自分達が表わしたかった事柄について、他者のみる視点がフィードバックされたことも、多様なみ方を体験できることにつながった。

今後の課題としては、みることがさらなる自分の表わし方やみ方につながっていくことを実感できる題材の配列の工夫が挙げられる。

6. 成果と課題

(1) ポートフォリオ評価法の開発実践を通して

①自己の振り返り

学期末などに蓄積された写真やカードを見て、振り返る場を作った。

2年生では、6月と12月に色つき紙粘土を使った造形活動を行った。「色の組み合わせや形を工夫しながら作る。」ということが活動の目標の中に入っている。子ども達にファイルを見せ、比較させて感想を書かせたところ、以下のような記述がみられた。(以下に、一部抜粋。)

- ・自分で形や色をするのがじょうずになった。
- ・マグネットは、色がまざったりしていたけど、わがしはまざることがなくなりました。
- ・前、思いつかなかったことが思いついたな。
- ・もとにしたきせつや場所をイメージしながら作れるようになった。

ポートフォリオに残された学習の記録を見て、振り返ることで、自分ができるようになったことを具体的につかみ取り、成長を実感することができた。

②コミュニケーションの手段として

年間を通じて、付箋を使った鑑賞を活動の中に取り入れることで、鑑賞の力を高めていくようにした。付箋を貼ったカードは、ポートフォリオの中に綴っていった。付箋に書かれた子ども達の記述は、以下のようなものであった。(以下に、一部抜粋。)

- ・もも色と白色がかさなっているところがかわいい。(2年生)
- ・はねが、しっかりとついているから高くまで飛べそうだね。(4年生)
- ・体に住人がいると考えられてすごなかよしというのが分かる。(5年生)

上記のように子ども達は、形や色などみるポイントを押さえながら鑑賞できるようになってきた。語彙が増え、鑑賞する力が豊かになってきている。

表1 付箋の記述にみられた学年別の傾向

低学年	形や色に着目しながら作品を鑑賞する。
中学年	形や色、材料の組み合わせから工夫点などを見つける。
高学年	作品の中に込められた相手の意図を読み取る。

また、学年別では、付箋に書いた記述で表1のような傾向が示された。

これは今回の実践研究によって示された傾向であり、教師側の言葉がけや扱う題材のねらい等で変わってくるものである。しかし、学年ごとに子どもたちの鑑賞の質が高まることを明らかにすることができた。

③評価

教師が、定期的に子ども達のポートフォリオにある記録を見ることで、年間を通じての指導にフィードバックをすることができた。付箋への記述は、「かわいい」、「すごい。」といった単純な表現が最初は多かった。そこで、鑑賞カードにみるポイントを付け加える工夫をし、これによって前述のように子ども達の鑑賞の質が上がってきた。

(3) アンケートから

アンケートを5月と12月に行なった。主に、自己の造形活動に関するもの（自分なりの美意識）、他者との関わり合いに関するもの（協同性）、子ども達の創造性に関するものである。最終的には表2のような結果になった。

表2 アンケートの結果

質問項目	4	3	2	1
①自分の作品のいいところを言うことができる。	30%	36%	33%	1%
②友達の作品のいいところを言うことができる。	57%	40%	4%	0%
③友達が自分の作品を見てくれるのはうれしい。	64%	26%	9%	2%
④友達の意見は参考になる。	51%	42%	6%	2%
⑤想像して書いたり作ったりすることは、楽しい。	67%	28%	5%	1%
⑥作品を作る時、どんどんアイデアが出てくる。	56%	34%	8%	2%

※ 4・・・よくできる 3・・・まあまあできる
2・・・あまりできない 1・・・ぜんぜんできない

ほとんどの項目で90%以上の肯定的評価があったが、①については、肯定的評価が66%で②と対照的な結果になった。作品に自信が持てずに自分のよさが他者に受け入れられるのかということに対しての不安があるようである。また、以下のグラフにあるように学年が上がるにつれてその傾向は高くなっていく。

子どもの自分なりの美意識を高めていくためには、自分自身の見方や考え方、そしてそれを受け入れる環境などを時間をかけて育てていく必要がある。

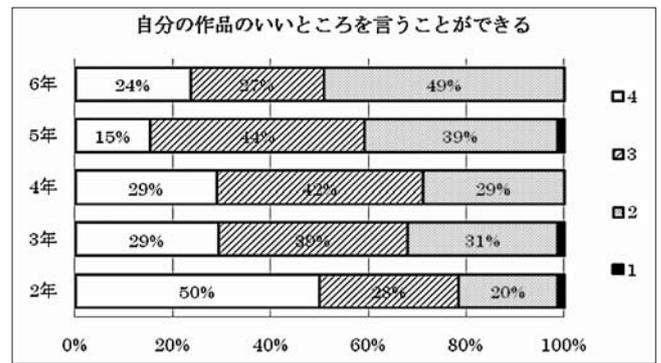


図8 質門項目①学年別の割合

7. おわりに

一年間、ポートフォリオ評価法を行って、自分なりの美意識を育む図画工作科教育法の指導の在り方について検証を行った。作品の写真を入れてページが増えるごとに子ども達は、喜びの表情を見せてくれた。一年間の学習の足跡や作品を取めたファイルは、子ども達にとってかけがえのない宝物であったに違いない。また、家庭に持ち帰ることによって励ましやアドバイスを受けたことも大きなプラスになっていた。次年度以降も継続して取り組みを続けていくことによって、子ども達の経験や知識が形として蓄積し、自分なりの美意識をより確かなものとして育成することを目指したい。

註

- 1) 文部科学省, 『小学校学習指導要領解説図画工作編』, 日本文教出版株式会社, 2008, p. 9
- 2) 中央教育審議会答申, 「幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について (答申)」, 2008, p.53

引用 (参考) 文献

- 1) Winner, E. & Simmons, S. (Eds). Arts PROPEL: A Handbook for Visual Arts. Educational Testing Service and the President and Fellows of Harvard College, 1992.
- 2) 若元澄男編, 『図画工作・美術科重要用語300の基礎知識』, 明治図書, 2000, p.21
- 3) 若元澄男編, 『21世紀の初等教育学シリーズ7 図画工作科教育学』, 協同出版, 2002
- 4) 中島敦夫, 岡芳香, 大和浩子, 内田雅三, 中村和世, 「ユニバーサルシティズンシップ育成と関連した美術教育の在り方を探って (3)」, 『広島大学学部・附属学校共同研究紀要』, (no.37), 2008, pp.331-336